# 図書館とソーシャル・キャピタル

柴内　康文（東京経済大学教授）

## ソーシャル・キャピタルとロバート・パットナム

ご紹介に預かりました東京経済大学の柴内と申します。年末の夜遅くにこうやってお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。「図書館とソーシャル・キャピタル」というお題を振られたはいいもの、どうすればいいのか、という話ですが、一方で、図書館周りではよく考えられたり、議論されつつあるテーマなのかなというようにも思いますので、そのあたりから話をしてみようかと思います。もともと今日はソーシャル・キャピタルのレクチャーをしてくれればいいからと、最初に頼まれたはずなのでかなりそれが入っているのですが、端折れるようでしたら流れ次第で、また考えていきたいと思います。

ソーシャル・キャピタル（social capital）はよく使われる言葉、概念になりつつありますけれども、ソーシャル・キャピタルと言われた時には、絆みたいなものだとか、つながりとか、ソーシャルとか信頼とかコミュニティとかそういった言葉を、あまり馴染みのない方でも思い浮かべるのではないかと思います。それと図書館という話なわけですが、このような観点から図書館を取り上げるというのは、最近の流れなのかもしれません。『ソトコト』では「おすすめの図書館」[1)] という特集を組まれていました。私も買ってみたのですが、内容を見ると「ソーシャルな図書館」といったおもむきで、ソーシャルという言葉もソーシャル・メディアとかそういうものから、つながり、SNS みたいなことが想像されますから、こういう図書館の中で、人々が、利用者たちがつながっている、ということがきっと意識されているのだろうと思います。

このあたりもっと明確にタイトルになっているのが『つながる図書館』[2)] と新書になったもので、これも猪谷千香さんのかなり有名な本です。2014 年の出版で、「コミュニティの核を目指す試み」というように書いてありますが、図書館がコミュニティの中心にある、そのことがいろいろなものを生み出していくのだ、ということなのだと思います。あとがきを拝見するともっと直接的で、最初はどういう企画だったかというと『戦う図書館』というもので、「3.11 以降のソーシャル・キャピタルとして」という副題だったと。ですからこの猪谷さんの本も最初の出発点はソーシャル・キャピタルそのものだったようです。中から少し文章を取り出してくると、「公立図書館というのは赤ちゃんから年寄りまで利用者の年齢を選ばず、職業・収入も選ばず、無料で使える稀有な公共施設」である、さらに「人と本だけではなくて、人と人を繋ぐ、コミュニティの中で新たな役割を担っている図書館の姿」というものがあるのだということで、具体的な有名な図書館がたくさん紹介されています。最初はやはり武蔵野プレイスあたりからで、小布施の図書館とか、後ろの方には武雄市などもあったかもしれません。図書館とコミュニティ、というのは、やはり関心が高いのかと、今回は書店サイトでも色々と検索してみたのですが、『図書館はコミュニティ創出の場』とか人とまちをつなぐ『マイクロ・ライブラリー』あるいは『コミュニティのための図書館』、『図書館がまちを変える』、あるいは「場所と空間として」の図書館、など、図書館のことも図書館情報学のこともあまり存じ上げないのですが、最近出版された本でこのようなタイトルがたくさんヒットすることから見ても、図書館というものをそういうものとして捉えていこうという流れ、気運みたいなものがあるようだとは、外から見ても感じられます。本当に単なる利用者なので、外野から見て図書館業界のことも正直よくわからないのですが、おそらく予算的な問題などもふまえて、図書館がどういう役割を果たしていくのかということをはっ

きり打ち出していかなくてはならない、また情報化などもきっと背景にあったのかと思います。要するに情報を取る、探す、見るだけであればさまざまな手段が登場した中で、図書館というものがどうあるべきなのか、という考え、そういった問題への意識の高まりのようなものがあって、図書館の機能というのは、一つはコミュニティとのつながりだというような認識に進んできたというようにも思います。

とりあえず、ソーシャル・キャピタルにそれほど馴染みでない方もいるかと思いますので、ソーシャル・キャピタルとはなんなのかということを、先ほどご紹介いただいたパットナムの本などを概説しながら一つはご説明しようと思います。その上で、「図書館とソーシャル・キャピタル？」クエスチョンマークがついているのは、いったいまだそれについて何が言えるのかよくわからない恥じらいなどもあってついているのですが、調べてみるともう研究と言いますか、データ分析なんかもそれなりに出ていて、また最近ネット上で話題になった関連する議論もあったりしますので、そのあたりも絡めながら考えていければと思います。

先ほどからご紹介もいただきましたけれども、ロバート・パットナム（Robert Putnam）が『孤独なボウリング』[3] という本を出しまして、私がそれを 2006 年に翻訳したのでこういった会に呼んでいただけるのですが、ソーシャル・キャピタルで何らかの話を、といったことはいろいろな領域であって、その度に「ソーシャル・キャピタルと何とか」の、何とかの部分が違う話をすることがあります。今日は図書館という感じです。パットナム以外にもソーシャル・キャピタルの議論を始めた方は前からいますが、今こうやってそれこそ新書の企画書にソーシャル・キャピタルという名前が入るようになった、きっかけになったのは、やっぱりパットナムが議論に火をつけたからかと思います。

彼は 1993 年ぐらいにまず、イタリアを対象としたソーシャル・キャピタルの考察書を出したのですが、そのあと 95 年にこの『孤独なボウリング』の原型になる論文を書き、2000 年にこの本を出して世界的にその議論に火をつけた、というように進みました。ソーシャル・キャピタルに関する研究は大体どれぐらいから増え始めたかというと、90 年代はおおむねフラットなのですけれど、やはり 95 年とか 2000 年ぐらいから一気に増えだした感じになっています [4]。いま社会科学の中ではかなり使われる、あるいはもう使われすぎてだいぶ警戒されたり、批判されたりする概念にもなっていますけれども、応用・実践分野ではよく使われますし、またそれだけの概念的な魅力があるということもあり、生き残っている部分もあるのかと思います。

## ソーシャル・キャピタル（社会関係資本）とは何か

ソーシャル・キャピタルという言葉は日本語で、社会関係資本と訳したりします。社会関係、特に人間関係なのですが、人が複数いると関係が取り結ばれるわけです。図のように 3 人いる社会があったとして、ここの 2 人しかつながっていない社会もあれば、みなつながっているような社会もあるということ、こういうつながりが多い少ないということを資本という概念で捉えたということです。要するにこちらはソーシャル・キャピタルが多い社会ですし、これはソーシャル・キャピタルがない社会だという風に単純には理解していただければとよいかと思います。「ソーシャル・キャピタル」ですから直訳して社会資本と言えばいいのですけれども、社会資本というと日本語では水道とか道路になってしまいますので、社会「関係」という言葉をわざわざ足して理解することになっています。人間関係が資本なのだという捉え方です。蓄積されてそれによって利益を生み出すことができるものを資本と捉えます。例えばフィジカル・キャピタル（物的資本）は、物としての資本です。包丁やら、いろいろな道具は資本です。そういう資本があって、初めて利益が生み出されるわけです。一

方で教育学とか社会学などでよく使われるのは、ヒューマン・キャピタル、人的資本と言ったりしますけれども、私たちが受けた教育とか知識・能力のことです。それもまた私たちの中に蓄積されていて、利益を生み出してくれる資本だということです。これらに加え、ソーシャル・キャピタルというのは人と人がつながっているということ、その多さ少なさというのがやはりまた、利益を生み出すというコンセプトだということです。パットナムが与えた定義でいうと、英語でそのまま書き抜くと、“social networks and the norms of reciprocity and trustworthiness that arise from them” です。まずソーシャルネットワークがあり、そこから立ち上がってくるレシプロシティ、相互のやりとりのしあい、互酬性と言いますけれども、そういう規範、あるいは信頼、信頼に値する行動をしなければならないという規範、そういったものを指します。基本的にはつながり、社会的ネットワークが蓄積されているということです。

先ほど、丸で示した人間の間に線を描いたり消したりしましたけれども、そういうつながりがたくさんある社会もあれば、そうではない社会もある。基本的にネットワークというのは、何かを与えたり、受けたりと交換を発生させます。つながりがあれば何かやり取りがあるわけです。やり取りがなければ、途切れてしまいます。もし与える一方だったら関係は切れてしまうでしょう。与えたり受けたりがあるから、関係は続いていくわけです。そういうやり取りが行われているということは、同時に、あげたら返さなくちゃいけない、あるいはあげたら返ってくるはずだ、という感覚をおそらく持たせるということになるでしょう。あるいは、信頼というものを作り出すのじゃないかという風に考えられます。

例えば、そうですね、お店で何か物を買ってお金を先に払って商品とか、ご飯が出てくるのを待つわけですけれど、お店のことを信じられるからお金を先に払って料理が出てくるのを待てるわけですよね。ここに信頼がないと取引できなくなります。信頼できない相手だったら、どうなるかと思うと、物をそこに出せ、金そこに置くからと、という感じの取引になるかもしれません。待てるのは、きっと出してくれるはずだ、この人は裏切らないと。裏切ると思ったら、要するに信じられなかったら、そもそも交換が成立しづらくなりますし、そことは付き合いをやめようとか取引やめようとなると思います。つながりがあり、交換が発生していれば、何かしたら返ってくるという感覚が発生するし、あるいはこの人はちゃんと返してくれるだろうという信頼がそこに立ちあがってくるのでしょうか。この互酬性とか信頼は交換を効率よくさせ、スムーズな取引を可能にします、相手が信じられないと交換はうまくいきません。例えば、お金忘れてお店行ったとき、信じてもらえるなら、ツケで今度来た時払ってくれればいいよってことになりませんか。そこではご飯が食べられますし、後で返すことで、その場での取引は成り立つわけです。この人は後できっと財布を持ってきてくれるはずだと思えば、お店の人はちゃんと出してくれます。お互いに無駄なくそこで取引が成立することになるわけです。こいつは信じられないということになれば、いや、お金がないと食べさせられませんから帰って財布持ってきてくださいということになるでしょう。このような社会というのは交換の効率が非常に悪くなります。いちいち証拠を、カタを出せとかこれを置いていけ、ということになりますから、その分スムーズに取引できなくなるのでしょうね。だからつながりが多い、そしてそれと同時に信頼とか互酬性規範が発生してくると交換の効率が良くなり、交換の量が増え、社会が無駄なく回っていくことが期待できます。逆にそれがない社会というのはさまざまな形で、ぎくしゃくしていくし、交換が効率よくいかない、そういう感じになるのかと思います。

あるいは近所に人間関係があるところとないところというのを考えるといいと思います。何年か前大雪が降った時なのですけれども、大雪が降ると写真のように雪かきなどするわけ

ですが、全然片付かないところもあるわけです。隣にだれが住んでいるのか知っているとか、要するにふだん日常的に付き合いがあるということになると、じゃあみんなで片付けようか、という話になります。例えば、ここは僕がやるから、あっちはそちらでやってくれとか、いいよ、とか。互酬性や信頼などが蓄積されていればスムーズに片付けが進むということにおそらくなるでしょう。でも、隣に誰が住んでいるのかわからないということになると、こいつのためにやってやることになるけれど、その代わりにあの人は先をやってくれるのだろうかとか、そのあたりが信じられなくなってくるから、だったら馬鹿馬鹿しいからやらないとか、この道具貸したら返ってくるのだろうかとか、そういうことも疑わなくてはなりません。でも、（写真）こういうところであればたぶん、じゃあ、うちにシャベルあるからこれ貸しといてあげるよ、などと言って、きっとそれは返ってくると信じられますから貸せるし、それによってスムーズに片付けが進むということになると思います。ソーシャル・キャピタルがあるところでは、互いの、相互の協力や協調がうまくいきますから、片づけもスムーズに進むということになるだろうし、ソーシャル・キャピタルがあまりないようなところだと、そもそも相互の調整もうまくいかないし、お互いを信じあって片付けをすることがしにくくなりましょう。結果として何が生まれるかというと、（写真）左の社会だとみながスムーズに会社行ったり、学校行ったりできるようになるし、転んだりもしなくなります。でも（写真）右の社会だと一ヶ月も二か月も、固まって歩きにくいんだよなと困りながらみなが歩けない、しまいには転んだり、怪我したりということも頻発することにもなるのではないかと思います。ソーシャル・キャピタルがどのような性質を持ち、社会に何を生み出していくのか、というのは例えば一つにはそういうメカニズムで考えることができる、ソーシャル・キャピタルがあることによって社会がうまく回るというのはそういう風に理解すればいいのかと思っています。これはうちの近所で最近、道路が通って交通量が増えるのでなんとかしなければ、と住民が立ち上がって市に要望を出そう、道路拡張するようになるけれど、子どももたくさん通るのだからちょっと何か考えてくれというような要望書を出すから署名を、というようなものがありました。やはり、その地域がお互い顔見知りで、こういう風になる、何とかしなくちゃいけないと思えば立ち上がりやすくなりますし、そのことによってより地域を安全にしやすくできるのだと思います。しかし誰が住んでいるのだか分からない、こういう時にどうしたらよいのかわからないし、自分が立ち上がってもみんながついてこなかったら、というような地域であれば、このようなことも起こりにくくなるでしょう。ソーシャル・キャピタルは、そういう仕組みで地域に利益をもたらすわけです。一方で信頼がないところだと、さまざまな手段で社会を回していく工夫をしなければいけません。（写真）停車禁止と柱ごとに貼るとか、盗難防止のために必ず鍵をかけてくださいと柱ごとに知らせ、また鍵は二つ付けなければいけないと鍵のコストが 2 倍かかるわけです、人が信じられないところでは。あるいは人がつながってお互い見合っていないところだと、その代わりにカメラで見てもらうような必要も出てきます（写真）。ソーシャル・キャピタルが欠落するとその代わりとして、別のコストを払って世の中を回していくような工夫をしなければいけなくなるように考えられます。あるいは警備員を雇って世の中の安全を守る、あるいは先ほどの雪かきの場合だと、業者に頼もうとか。そこでまたコストがかかって、お金など他に使えるはずだった資源が使えなくなってしまうわけです。また相手が信じられなければ、ちゃんと契約書を結ばないと、とかいうことになりますね。しっかりと明文化しておこうということになります。弁護士を立てるとか、そういうものも当てはまるかもしれません。制度によって、失われた信頼を補完させる形で、世の中を回していかなければいけない、と考えられるわけです。

## ソーシャル・キャピタルを計量化したパットナムの研究

パットナムのおそらく大きな貢献は、このソーシャル・キャピタルというものを何とか計量化して、地域を比較していく枠組みに乗せたことなのだと思います。アメリカにおけるソーシャル・キャピタルを測定しようということで、人々がどれくらい社会に参加しているかとか、選挙などにちゃんと行っているか、ボランティアをどれくらいしているか、友達付き合いはどうか、人は信頼できると思っているのか、そういったことをアンケート調査の結果などを総合する形で得点化しまして、州ごとに集計するとアメリカはこんな感じで、色が黒っぽいところは人づきあいが多かったり、信じているところだし、白っぽいところはそういうのものが失われている、人を信じない、人と交わったりしない、とこんな感じで色分けができている（『孤独なボウリング』表 4、図 80）。

アメリカは、このあたりが白いのですけれど、南部諸州で、要は奴隷制がきつかったところです。ですからソーシャル・キャピタルの高低には、例えばこういう歴史的な経緯も考えられるのかもしれません。要するに奴隷制というのはある種、根本的な意味で信頼を破壊するような側面がある、あるいは黒人と白人の絆を断ち切るような仕掛けとして存在するわけですから。そういった経緯、過去があるようなところが色が薄いというのは、ソーシャル・キャピタルが歴史的に決まってくる部分があるというところと絡んできます。

先程、ソーシャル・キャピタルの濃淡を出しましたけれど、ソーシャル・キャピタルが多いところと少ないところで何が起こっているのかということで、パットナムがまとめたのはこういう図表、一つ一つの点はアメリカの州ですけれども、横軸がソーシャル・キャピタル指数で、右に行くとソーシャル・キャピタルがある、すなわち人づきあいが多かったり、人を信じている所です。そういうところの方が、死亡率が低くなる。逆に、そういうものが欠けているところというのは、死亡率が高くなっている、ということをこの図は示しています（『孤独なボウリング』図 86）。そもそも人間関係が多いと、個人のレベルで健康になりやすくなるのですが、それだけではなく、周囲の人間関係があったり、周囲を信用しているということが、例えば社会的な政策を実現させやすくしますから、協力してよい病院を誘致しようとか、そういうことも可能になります。マクロ的にはそういうことも考えられるので、複合的な要因で健康度は上がるのだろうというように考えられます。人づきあいが多い人は、健康である、というだけではなく、それにプラスされる効果がおそらくあるのだろうということです。

それだけではなく、ソーシャル・キャピタルが多いところは「教育達成指数」が高いとありますけれど、子どもが成長しやすい、例えば学力達成度が高いとか、留年したり退学したりしないですとか、そういう総合的な指数なのですが、人づきあいが多い、人を信じている所の方が子どもの成長にもよいのではないかという話です（『孤独なボウリング』図 82）。あるいは、これはもう少し露骨なものですけれど、人間関係が多くて人を信じている所の方が、「殺人率」が低まる。治安に実は効いている（『孤独なボウリング』図 84）。

また、地域内の格差ですね（『孤独なボウリング』図 92）。縦軸は所得分配の平等性なので、上に行けば行くほど、平等な社会が実現されている。下に行けば行くほど、貧富の差が激しい、格差が厳しいということですが、人づきあいがない、相手を信じていないところの方が、格差がきついし、人づきあいが多い、相手を信頼している所の方が、平等な社会が達成されているとか、そういう形で、ソーシャル・キャピタルが、あるいはソーシャル・キャピタルの多い少ないが、社会の様々な面においてプラスの効果を発揮しているということをパットナムは主張しています。では、ソーシャル・キャピタルを何とかして増やしていくように、左側にいる州が右の方に行くようにいろいろと考えていかなければいけないという話になる

のだと思います。

## アメリカにおけるソーシャル・キャピタルの低下とその理由

しかし、ソーシャル・キャピタルが、大体 1970 年ぐらいからどんどん下がっている。アメリカ全体として見た時に、むしろますます低下しているっていうことを同時に示したのがパットナムが注目されたポイントだと思います。ソーシャル・キャピタルはこのように世の中にとって重要なのに、そのソーシャル・キャピタルがどんどん減っている、無くなっているということを示したということです。これは政治への関わり、様々な集会に参加したりとか、政党のためにボランティアしたりとか、アメリカの政治文化っていうのは日本とちょっと違って、一般の人々がだいぶ関わるわけですが、そういうのをますますやらなくなっている、見ているだけというような、そういう風な感じになっていると（『孤独なボウリング』図 4）。あるいは地域活動、町のそういう活動ですとか、学校などの活動、クラブの役員を務めるとか、そういうのも大体 70 年ぐらいから減っていると（『孤独なボウリング』図 5）。

PTA ではかなり明瞭です。PTA 運動が始まったのは 1900 年前後あたりなのですけれども、大体 1960 年ぐらいに、参加率、ここでは家庭 100 当たりの会員数がピークで、それからは一気に減少している（『孤独なボウリング』図 9）。さっきのパターンと大体同じで、アメリカ社会は 60 ～ 70 年代ぐらいから、人と人の関係とか、あるいは信じるとか、どうも急落していったのじゃないかということです。

全体として考えた時にアメリカ社会がこの方に向かっているということになりますから、それがパットナムが警鐘を発したところだったわけです。この下がり方については、さまざまな領域で同じパターンを示しているのだということが指摘されていきます。

アメリカ人はキリスト教徒が多く、日曜には教会へ行くわけですけれども、やはり 1960 年ぐらいを境に教会に行く頻度というものが減っていると（『孤独なボウリング』図 13）。あるいは労働組合も PTA と同じで 1950 年代～ 60 年代、この辺がピークで、それからはずっと下がっている（『孤独なボウリング』図 14）。

これだけ様々な領域で同じように、同時に人づきあい、人間関係が減少していったのには何かあるのではないかというように考えていったわけです。友達の家との行き来という行動も、データがあるのは 75 年ぐらいからですが、この辺から少しずつ減っているのではないか（『孤独なボウリング』図 18）。あるいは寄付、宗教への寄付とかチャリティへの寄付もどんどん、80 年代からのデータしかないのですけれども、2000 年にかけてますます減っていると（『孤独なボウリング』図 33）。

先程、信頼とか互酬性という話をしましたけれども、この信頼というのも下がっています（『孤独なボウリング』図 38）。縦軸を「人づき合いにおいて注意するに越したことはない」ではなく「大半の人は信頼できる」と答えた割合ですけれども、60 年代ぐらいには大体 55％ぐらいが、大半の人は信頼できるよねと答えているにも関わらず、2000 年にはそれが半減しています。人間関係も減っているし、信頼のレベルも落ちているのではないのかというわけです。この図では高校生のデータがさらに急落しているわけですが、上の線は成人で、高校生はその後で成人になっていきますから、この後はもっと下がっていくのだろうと予想できるわけです。

では 60 年代から 70 年代以降、どうしてソーシャル・キャピタルが減っていったのかということを考察したのがまたパットナムの仕事でした。確定的なことは言えないのですけれど、彼としては 4 つぐらい理由を挙げていて、一つは、このぐらいの時期から労働環境が変化したのだろうと。みんな忙しく労働時間が長くなったというのもありますし、または女

性が就労を増大して共稼ぎ化したというのもあるのではと触れています。女性の社会進出が進んでいったのはこの頃です。女性が社会進出するのはもちろん望ましくまた推進されるべきことで、悪いことなどでは全くありません。ただし、それ以前というのは女性はやはり家庭にいたりとか、地域にいる時間が長かったので、それだけ地域の人間関係を担う可能性が高かった。女性の方が男性よりも人間関係は多いということもありますが、そういう女性が人間関係を作り発達させていく場所が地域ではなく職場になってしまったということが一つ考えられるわけです。

あと住み方ですね、郊外化など、居住形態が変わっていった。多くが郊外に住むようになる、そうすると一つには通勤に時間がとられます。車で通勤したりしますけれど、その通勤時間というのは一人で過ごす時間になってしまいますから、一時間とか二時間とか、そういう時間が一定の幅で取られてしまうわけです。また職場が衣食住の場と比較的近かった時代から、職場と住むところが離れるとみなが働きに集まってきて、帰っていくという感じになります。職場であったつながりなどはそのまま持続はしないわけですよね。プライベートな場所では持続しない。そういう住み方、郊外化というのがやはり、人間関係を失わせやすかったのではないかと考えられています。

60 ~ 70 年代の大きな社会変化の一つとして、パットナムが原因として大きいのではないかと考え、かつその主張について強く批判されたのが、テレビが影響したのではないかというポイントでした。そもそも私は専門がメディア論なので、この辺からパットナムに入っていったのですけれども、テレビというのはアメリカ社会で 50 年代から 1960 年代ぐらいには 8 割ぐらいの家庭に普及したような感じになっています。ですので、ちょうどテレビが普及したあたりから人間関係が減っているような時間的タイミングとなっているわけです。なぜテレビが人間関係を減らすのかと考えた時に、一つはテレビは人間を家の中につなぎとめてしまう、家の中にいないと見られませんから。それで生活、娯楽の屋内化が起こってしまった。テレビがなければ、ご飯食べた後、友達の家に遊びに行ったり、一緒に映画見に行こうか、など外に出て社交していた時間が、家の中でそれぞれテレビ見る時間になってしまった。テレビを見る時間は以前は 4、5 時間などの生活時間を取っていましたので、それだけの時間が家の中で過ごされるようになったというのは大きな変化だったのではないか、と考えられていたということです。

あとは、メディア論に関わってくる問題なのですけれども、テレビの内容、コンテンツのインパクトがあったのではないかと、テレビの表現などが信頼を下げる方に、すなわち暴力的なシーンとか、様々な裏切りとか、事件などはどうしても番組やニュースのテーマとなりますので、そのあたりから、人というのは信頼できないんじゃないかという、信頼を下げる方向に寄与したのではないか、と。これはメディア論ではガーブナー（George Gerbner）という人が提唱した培養理論（cultivation theory）という考え方なのですけれども、そういったものも援用しながら議論しています。

あとパットナムが、最大の要因はおそらくこれだろうと考えたものが、世代交代です。大体割合で言うと荒い推定なのですけれど、世代交代の部分で半分ぐらい実は影響していて、ただ新しい世代、イコール、テレビ世代なので被っている所があって、テレビの影響が四分の一ぐらいであとはまあ労働とか居住形態の変化というのはこれぐらいの割合しかないのではないかとパットナムは考えています（『孤独なボウリング』図 79）。

最大の要因としてなぜ世代交代かというと、こういう図表があるのですが、生まれた年で見ると、大体 1940 年とか、この辺生まれぐらいの人までは、平行になっている（『孤独なボウリング』図 71）。何が平行になっているかというと、選挙に行ったりとか、新聞を読ん

だりとか、人は信頼できるとか、あるいはコミュニティに関わって働くとか、そういったものは大体 1940 年生まれぐらいまでの人はよくやっているのだけれど、そこからの落ち加減が激しい。なぜそうなのか、についてのパットナムの考えですが、やはり戦争体験というものはかなり大きかったのだろうということでした。戦争というのは、幸か不幸か、絆を強調します。団結しなくちゃいけない、みんなで耐え、協力し、切り抜けなければいけないという価値観をさまざまな形で植えつけます。危機の共有というのは、やはり団結心を強める可能性が高いと。日本でもそうだったかもしれませんが。そういうことが起こると、それは一方で衆人監視というか、監視社会みたいなものを生む可能性も高いわけですが、やはり一方で、みんなで頑張りましょう、耐えましょう、というようなことを日常的に言うし、あるいはみんなで切り抜けるということが評価される。それで 1940 年ぐらいまで生まれの人だと、終戦 1945 年で 5 歳ですから、そういうものの影響をある程度受けているところが、最後はここの世代まででではないかと考えられているわけです。さらにそれがなぜ 1960 ～ 70 年代から下がっていくことにつながるのかというと、1940 年生まれの人は 20 歳になるのが 1960 年ということになります。要するに戦前生まれの人が社会の中で第一線となり、中心となって活躍していくのが 1960 年から 70 年ぐらいがピークなのだろうと考えられるわけです。1960 ～ 70 年代ぐらいからは、戦後生まれの世代に中心がどんどん切り替わっていきます。1945 年生まれの人、終戦時点に生まれた人は、1965 年に 20 歳になり、社会の中心を担う存在になっていくわけです。戦争以前に生まれた人と戦争以後に生まれた人の違い、戦争以後に生まれた人はむしろ、これからは自由なのだ、自分のやらなければいけないことを追求していく時代だというような空気の中で教育を受けたり、あるいはそういう意識を高めた中で成長していったのかもしれない。学生運動がどういう時期にあったかということを考えてもいいのかもしれません。だから（図）ここまでの人たちが社会の中に出て活躍していく 1960 ～ 70 年代ぐらいから、こちら側にスイッチしていく過程の中で、ソーシャル・キャピタルの低下というのがこの辺りで起こったのではないかと考えられているわけです。パットナムはこの世代のことを、「長期市民世代」（long civic generation）と名付けているのですが、戦前生まれのこの世代が 60 ～ 70 年代ぐらいまでの人づき合いの多さ、また他人を信じることの大事さというものを生み出していたのではないか。そこからは、世代交代によってどんどん下がっていたのだろうということです。類似することは、他所でも考えることができるのかもしれません。まだ記憶に新しいかもしれませんが、大震災があるとやはり絆というものが強調される、私たちはお互いに助けあわなければいけない、乗り越えなきゃいけない、ということですよね。災害、国家的な危機とか、そういうことが起こると、私たちはそのような意識を非常に高めます。皆さんも実際感じられたのではないかと思います。ただし、そういった、凄まじい犠牲と引き替えにソーシャル・キャピタルが強まるのではなく、他に何かないのかということは言いたくなるわけですけれども。ただ、それこそ阪神淡路大震災、1995 年ですけれども、やはりあの時も頑張ろう、絆だっていうことはだいぶ強調されました。

私は中村さんと同じで以前は関西で仕事をしていて、神戸市などのソーシャル・キャピタルのプロジェクトにも入っていたのですが、1995 年が震災で、10 年経った段階で 2005 年ですね。いまではもう 20 年になります。震災 10 年にもなるとだいぶそのあたりの意識が薄れてきて、同時に住民の入れ替わりも激しいものですから、これからの街づくりにあたってそのような点をどのように考えていくか、というのは論点の一つだったように思います。

そのような形でパットナムはソーシャル・キャピタル概念を定義し、計量し、ソーシャル・キャピタルがいかに重要かということを示し、またそのソーシャル・キャピタルがこういう

形で失われていっているということを説明し、最後にはソーシャル・キャピタルが下がっているまま 2000 年を迎え、これからどうやって増やしていったらよいかということを議論して大体『孤独なボウリング』という本は終わっています。最後にパットナムが指摘していたのは、20 世紀前半の、ソーシャル・キャピタルが増え始めた時期に学ばなくてはいけないのではないかということです。このあたりからつながりを生むイノベーションというのがいろいろ起こっていたのだろうと。例えば PTA とかもそうです（1897 年）。学校で教師と親たちが、つながって子どもたちのためにやっていかなければならないという運動は例えばこういう時期におこりました。あるいはボーイスカウトなどもこういう時期です（1910 年）。アメリカも工業化して、都市に人が流れ込んでそこで絆が失われていたということが前提になっています。そのような中で、いろいろなつながりを生むイノベーションというのが生まれてきたと。ライオンズクラブ（1917 年）とか、そういうものを考えてもいいかもしれません。こういうものを指して、ボランタリー・アソシエーション（voluntary association、自発的結社）と言いますけれども、パットナムはもう一回何か、21 世紀流の新しいイノベーションを生まないといけないのではないか、という議論を展開したのが、『孤独なボウリング』の最後になるのかと思います。

## ソーシャル・キャピタルへの批判

2000 年にこのような本が出まして、ソーシャル・キャピタル、社会関係資本という概念は、これが一般読者に向けた本だったこともあり、かなり広く受け入れられることになります。研究もかなり増えていまして、当然ながらたくさん批判もされるようになります。その中では、そもそもソーシャル・キャピタル概念があいまいではないか、ネットワークと信頼、互酬性の規範をパッケージにしているわけですけれども、独立して扱えばよいではないか、ネットワークはネットワークで研究すればいいし、信頼は信頼で研究すればいいのに、何でそれを一緒にして議論するのか、などあります。（表）これはフィッシャー（Claude S. Fischer）という社会学者が『孤独なボウリング』についての議論をする時に示した分析結果なのですが、信頼と投票行動も、教会に行くことも、組織に参加することも、周辺の人や友人との付き合いも、寄付も相互にほぼ無関連であることが示されています[5)]。複数の構成要素を一緒にまとめる意味がほぼない、ということです。またソーシャル・キャピタルが何か利益を生み出す、というメカニズムが非常に曖昧だとか、あるいはソーシャル・キャピタルというのがまるで万能薬、何でも治せる魔法の薬のように扱われているけれども、ソーシャル・キャピタルがよいものであるとは限らない、という指摘もあります。

ここまでもソーシャル・キャピタルのよい話ばかりしましたが、人間関係はそのもたらす結果を悪い方にも引っ張ります。それはしがらみとか悪縁という形で私たちにネガティブな影響を与えることもあるわけですが、それだけではなく、例えば犯罪組織であっても密接なネットワークでつながっていますから、彼らはつながりの力を、悪事をなすために使っているわけで、ソーシャル・キャピタルというのは常にプラスの物をもたらすわけではないのだろうと言うことです。「ダークサイド・オブ・ソーシャル・キャピタル」という言葉もあります。また、パットナムは歴史的な変化として、前半では上がったけれど後半で下がって壊滅しているというけれど、そういう結果が見られるものだけ取り上げていないかという批判もあります。どのようなことか例えで説明すれば、昔、30 年 40 年前に比べて子どもたちが、野球をやらなくなった、キャッチボールをやらなくなった、グローブも売れなくなっているというデータを示したとして、だから子どもたちの運動量が減っていますと言ってよいのかという話です。そこを捉えれば、子どもたちはこのように現在運動しなくなっています、と

言えるかもしれないけれど、もしかしたら今の子どもはサッカーをしているかもしれないですよね。パットナムは下がったところだけでデータを作ってないか、人間のつながりっていうのは時代によって領域が変わっていくので、都合のよいところだけ、要するに下がったような、古臭くなったところだけで議論して、他の形で代替されているということを軽視しているのではないか、というものもあります。これらについては、パットナム自身の反論ももちろんあるわけですが。

ただソーシャル・キャピタルという概念は、いろいろな側面で魅力があるのだと思うのです。ネットワークとか信頼というものを、これは批判点でもあったわけですが、一方でパッケージとして捉えて、それが社会問題の解決とか、実践面で考えられるというのは、かなり魅力的だし、そのような実践志向の強い人にも、非常に受け入れられやすい概念だったと思うのです。地方自治の領域などでも、ソーシャル・キャピタルは非常に意識された時期もありましたし､今でもそういう流れはある程度続いているのかなと思います。ソーシャル･キャピタル、社会関係資本という言葉自体はほぼ定着し、これをいかに問題解決につなげていくかという点から使われるようになっていったのかと感じます。

## 日本におけるソーシャル･キャピタル研究

日本でもソーシャル・キャピタルブームのような展開はいくつかの形でありまして、特に政府のレベルでも、パットナムと似たようなやり方で調べたものがあります[6)]。これは内閣府の 2003 年のデータでネットにも上がっていますけれども、近隣の付き合い指数、信頼指数、社会参加指数を都道府県別に算出しています。三つ測定していますが、大体連動しているからということで一本化した総合指数もあります。

（図）東京はここで、低いです。関東、また関西の都心圏は低いですね。一方で高いところは、東北とか中部とか、島根、鳥取の山陰が高いのですね。九州も高い感じです。この中で言うと、奈良とか古くからある伝統的な感じで、つながりなどもあるような気もするのですけれど、かなり低めに出ています。私は、以前に NHK 奈良放送局で、奈良県の方の生活時間調査のデータを見たことがあって、その時に知ったことの一つに通勤時間の長さがありました。大阪などの通勤圏として、ベッドタウンになっているようだったのですね。ですから他の都道府県に比べて通勤通学時間の長さが印象に残りました。そうすると、やはり社交というのがそれだけ減ってしまうのかなとその時は理解しました。日本の都道府県はこのような状態にあるということで、このレポートではそのあといくつかの分析をしています。（図）一個一個の点は都道府県ですけれども、ボランティアをしている人が多いところは、やはり犯罪が少ないとか、そういうつながりや絆が多いところは、犯罪が少なくなるとか失業率も低いと｡どういうメカニズムなのかはっきりとしたところはわかりませんが､ソーシャル・キャピタルが多いと誰か紹介しやすいとか、お前ちょっと困っているの、じゃあ助けてやるよ、とか声がかけやすかったりそういうのがあるのかもしれません。あとボランティアが多いところは出生率も高くなる。要するにソーシャル・キャピタルの多いところというのは、治安が良くなったり、地域として繁栄しやすかったりするのではないかということで、国としてもそのようなデータを出していました。いろいろな省庁も、ソーシャル・キャピタルと○○といった報告書を出したり研究会をしたりしています。同様の試みは地方自治体でもですね。先ほどは神戸市の話もしました。

こうしてくると、パットナムの議論と並行に考えるのだったら、では日本も 60、70 年代ぐらいから人間関係は下がったのか、やはり失われつつあるのかということが一つは気になるのではないかと思います。実際、昔の方が人間関係が、人づき合いがあったような、

『ALWAYS 三丁目の夕日』的なことを思い浮かべたりもしますし、何年か前ですと、「無縁社会」といった言葉がクローズアップされたりとかしたこともあって、やはり日本も無縁化が進んでいるのではないかと。ただ「無縁社会」が話題となったのはちょうど震災の前の年ぐらい（2010 年）だったと思います。そういう状況があった中で震災が起こって、絆というのが一気にクローズアップされたような、時間的な流れだったかと思うのですが。そうすると 1960 ～ 70 年代からの急落といった問題は別になかったのではないかという気もするわけです。このあたりも色々調べられたりしています。（図）例えば市民活動とか、ボランティアとかそういうのものは、日本に関していうと 80 年代から 2000 年代にかけて横ばいかあるいは場合によっては上がっていたりするのではないかということで、人づき合いがそんなに下がっているとか、みんなが社会に関わらなくなったというのはないのではないかとは猪口孝さん、これは東大におられた政治学者の論文です[7]。このテーマについては最近、坂本治也さんという方の本の議論もあり、2000 年ぐらいまでは確かに横ばいなのだけれど、2000 年から先というのは結構下がっているのではないか、信頼や人づき合いなんかも下がっていて「30 年遅れのボウリング・アローン」のような現象が日本に起っているのではないかという指摘をしました[8]。日本がアメリカ社会を追いかけるタイムラグというのは、大体 20 年とか 30 年あるとか言われることはよくありますけれど、それにも近いような議論かと思います。

## シカゴの図書館とソーシャル・キャピタル

さて、ここからは 30 分で「図書館とソーシャル・キャピタル？」を喋れという話になるわけです。先程パットナムが、2000 年代流の市民参加とか人々のつながりのイノベーションを考えなければいけないのじゃないか、としているということで、例えばアートとか、街づくりとかを通じた仕掛けづくりも考えられるのではないかと、本の中で言っているのですが、パットナムは『孤独なボウリング』を出した後、実は *Better Together*[9] という本を 2003 年に出しています。この『Better Together』、要するにみんなで共によりよく、ということで、副題には “Restoring the American Community” アメリカのコミュニティ再生のためにはどうしていったらよいのかというものがついています。ソーシャル・キャピタルをどうやって再生させていくか処方箋のようなものを一章ずつやっているような本です。それこそ、アートの領域でこんなことができるのではないかとか、居住地の問題でこういうことができるのではないか、とか、あるいは労働組合ではこういうことができるのでは、あるいはネットを使って人間関係とか信頼、街づくりは、などそういうことを書いているのですけれども、実はその中で一章を使って図書館について論じています。本の最初の方なのですが、そこで取り上げている事例というのがシカゴの公立図書館です。

シカゴの図書館、public library system、CPL について論じているのですが、特にニアノース（Near North）という地区の分館について事例として取り上げるという形で議論していました。このニアノース分館、まず立地の工夫もあるのですね。（地図）ニアノース分館があるのはこの辺なのですけれども、右の方にあるのが五大湖のミシガン湖、これがシカゴの街です。ここにゴールドコースト（Gold Coast）と書いてあって、もう一個ここにカブリーニ（Cabrini）と書いてあるのですけれども、湖畔沿いのゴールドコーストというのはいわゆるよい住宅街です。白人中心の裕福な人が集まる住宅街で、反対側のカブリーニというのは貧困の荒れた住宅地だったそうです。ここでカブリーニにも図書館が必要だし、ゴールドコーストにも必要なのだけれども、でもそれを全部建てている予算的なものは取れない、一個しかないということで、ここに設置したそうなのです。実は絶妙な所に立っていて、ちょ

うど中間に建てているのですけれども、ここに電車が、シカゴのＬ（エル）というのですが、高架鉄道が通っています。高架鉄道のすぐ脇、いい住宅街の方に寄せて建てたのですね。ここに建てた理由というのはどうもあるらしくて、その高架鉄道の線というのが、カブリーニとゴールドコーストのある種心理的な境界線、壁のような機能をもっていて、あっちから向こうはちょっと、のようなラインにどうもなっていたらしいのです。その線よりも向こうに建てるとゴールドコーストの人が行かなくなってしまうので、ちょうどその線の際の、かつ線の内側、湖側の所に建てた、そうするとぎりぎりゴールドコーストの人は行けて、かつこちら側の人たちも行けるというようなところに配置したのだそうです。上手く両方が混じり合うようなところに建てられたというところです。細かいところを議論しだすとあれなのですが、ニアノース図書館は各地域の学校なんかにもどんどん入って行って、どういうニーズがあるのかということを調べて、子どもたちが来られるような状況づくりをしたりですとか、それでそのことによって何が起こるのかというと、カブリーニの子どもたちがニアノースの図書館で宿題などやっていると、そこでボランティアをやる人は反対側の住人に必然的になるのです。そうすると、ゴールドコーストの住民とカブリーニの住民との接触というのがある意味自然な形で起こりやすくなる、立地によって交じり合う、そういう形でということです。

ソーシャル・キャピタルは二つあると言われていて、身内で固まる結束型のソーシャル・キャピタルと、異なる人がつながるような橋渡し型のソーシャル・キャピタルというのですけれども、後者のようなものが上手く生み出されるような仕掛け、立地から始まってそういうものが考えられているという話かと思います。実際、図書館だけで栄えてきて、というのではないでしょうが、地域がだんだんと良くなっていろいろな施設なども建ち始めたりとか、少しずつ良くなっているらしいです。あと、シカゴの図書館システム全体としては、ブランチ（分館）がたくさんあるわけですけれども、ブランチにはそれぞれ地域の特性があるので、住民の構成なども大きく異なっていますし、それに合わせた選書やイベントを組んだりもしているとか、またこの当時はインターネット環境が入りだしたころなので、デジタルアクセスの場所としての図書館、ということの意味も大きく、そのようなものが使える場所として図書館は機能していた、など。また、全市で課題図書を一冊読む、ようなプロジェクトもあったそうです。最初は『アラバマ物語』（*To Kill a Mockingbird*）だったか、みんなでこの本を読もう、といったもので、全市でですね、シカゴにはいろいろなブランチ図書館があるけれども、でも一つのシカゴだ、のような訴えかけをやった。読んだ読んだ、といった話をして盛り上がるような、また互いに全く知らない人でもその本を持っていると、それ読んだの、という話ができる、そういうような仕掛けがあったそうです。シカゴの図書館というのは、単なるリポジトリではなく、ギャザリングプレイスなのだ、といった感じで、やはり、ご多分に漏れずシカゴの図書館も予算カットにあって大変なことになっていたらしいのですけれども、さまざまな試みを通じ市民にも受け入れられて何とか回っていくように、価値が認められるようになってきたということでした。このようにパットナム自身がソーシャル・キャピタルを作り出していく事例として図書館を取り上げたりなどしています。ざっと読んだだけなので内容を正確に理解していないかもしれませんが。

## ソーシャル・キャピタルと図書館の関係の研究：原因か結果か

さて、ソーシャル・キャピタルと何々、という研究は、さまざまな領域であります。ソーシャル・キャピタルと健康だったり、ソーシャル・キャピタルと教育だったり、大学にはいろいろな学部がありますけれども、学部ごとにソーシャル・キャピタルをテーマにした研究

をそれぞれ考えることができるぐらい、さまざまな研究領域をソーシャル・キャピタルと結びつけることができます。

実際にたくさんの領域でソーシャル・キャピタルを使った研究が行われていますが、ソーシャル・キャピタルと何々、と言った時に、ソーシャル・キャピタルの使い方は基本的に二つです。すなわち、何がソーシャル・キャピタルを高めるか、という形で自分の研究を考えるか、ソーシャル・キャピタルは何を高める、と考えるか、大体どちらかになります。このあたりがまたソーシャル・キャピタルが批判される点でもあって、ソーシャル・キャピタルが原因にもなるし結果にもなるという感じで、こっちであればソーシャル・キャピタルは原因ですし、こっちであればソーシャル・キャピタルは結果なのですけれども、ではソーシャル・キャピタルとは何なの、というのは批判されるポイントでもあるのですが、逆にソーシャル・キャピタルが使いやすい点でもあるわけです。

例えば、何かがソーシャル・キャピタルを高める、という研究は、先ほど歴史の話をしましたけれど、このような歴史的背景がソーシャル・キャピタルを高めたり低めたりします、という議論にもつながってきます。あるいは街づくりとか都市設計では、ソーシャル・キャピタルを増やしていくためにはこういう居住空間を作っていく必要があるとか、働き方では、こういう働き方をするとソーシャル・キャピタルは増える可能性があるとか、あるいは毀損される可能性がある、とか、あるいはメディア論ではテレビがソーシャル・キャピタルをどうするとか。私の研究の領域では、インターネットはソーシャル・キャピタルを増やすのか減らすのかとか、そういう研究になるわけですね。ソーシャル・キャピタルと○○と言った時に、○○の方が原因になって、結果をソーシャル・キャピタルとして捉える研究があります。

一方でソーシャル・キャピタルが原因で、それが何かをもたらす、という方向の研究もあって、「健康」などはまさにそれにあたります。ソーシャル・キャピタルが高いと住民は健康になりやすいとか、医学、疫学の領域でソーシャル・キャピタルを使う時はソーシャル・キャピタルを原因として捉えることが多いです、結果としての住民の健康、とかそういうものですね。あるいは治安とか犯罪、犯罪の社会学や心理学の研究では、基本的にはソーシャル・キャピタルがあると治安が高まるとか街が安全になるとかそういう形で研究をすることが多いです。この場合はソーシャル・キャピタルは原因であって、結果として地域の安全安心、といったものを捉えています。

教育達成、ソーシャル・キャピタルがあると学校が上手くいくとか子どもたちが落伍しないというものもそういうことなんでしょうね。ただ教育、と結果の方に書いてしまいましたけれど（図）、教育は原因にも結果にもなりますね。ソーシャル・キャピタルがあると子どもたちが上手く成長する、という意味では結果ですけれども、こういう教育をすればソーシャル・キャピタルは高まる、という形で、教育はそうやって介入してソーシャル・キャピタルを増やしていくこともできるので、教育学の中では原因として使うようなことも、教育を原因にしてソーシャル・キャピタルを結果に捉えることもあると思います。信頼感をいかに高めていくかとか、それこそ子どもたちのコミュ力をどうやって高めていくか、さらにその結果としてソーシャル・キャピタルを増やしていくと考えたいのであれば教育が原因でソーシャル・キャピタルが結果、と思います。成績であれば、ソーシャル・キャピタルが原因で、成績が結果でしょうね。経済発展、だと結果になると思います。

政治とか制度の話だと、ソーシャル・キャピタルのあるところでは世の中が上手く回るとか、そういう話として原因として取り扱うことが多いかもしれません。パットナムのイタリアの研究はそうです。ただこれも、逆に使うこともありますね、経済発展、あるいは格差と

いうものがソーシャル・キャピタルをどう変えるのか、と取り扱うこともあるでしょうし、あるいは何かの制度がソーシャル・キャピタルを高めるとか低めるとかというように使うこともできると思います。例えば、法制度のようなものがソーシャル・キャピタルを下げるのではないかっていうのは、考えられるかもしれません。個人情報保護法制というのができたと思います。例えば個人情報保護とか、プライバシーへの意識が高まる、そういう制度が作られるとその中で、名簿などが作りにくくなり、連絡先などもよく分からなくなったりしたかもしれません。そうするとつながりが作りにくいということになっていくかもしれません。いろいろな政策とか制度がソーシャル・キャピタルを高めるかもしれないし低めるかもしれない。政策がソーシャル・キャピタルにどういうインパクトを与えるか、という議論はありますから、そういう時は政策や制度を原因として考えることになるのだと思います。

ここで立ち上がってくるテーマは何かというと、図書館はXなのかYなのかという話でしょう。どちらなのでしょうかとこちらが聞きたいところですけれども、ただこういう観点から考えると、ソーシャル・キャピタルが人を繋いでコミュニティを作っていくと考えるのだとすれば、図書館が原因になっていて図書館がソーシャル・キャピタルを生み出すという風に捉えることが多いのかなという気がします。つながりを生み出していく機能としての図書館ということですから。場合によっては図書館とソーシャル・キャピタルがあまり区別されてない感じすらします。原因というよりもソーシャル・キャピタルそのものと捉えられているような節もないではないですよね。だから図書館がどこに位置づけられるのかといえば、たぶん図書館を使うこと、あるいは図書館があるということ、図書館が行うさまざまなプラクティスが、ソーシャル・キャピタルをもしかしたら高めるかもしれない、地域の人のエンパワーメントなどを通じてソーシャル・キャピタルを強めていくのではないかというように考えるのがまずは自然というか、そこから図書館が何ができるか、ということにもつながっていくのかと思うわけです。ですから個人レベルでは、図書館を利用することが、例えば個人のソーシャル・キャピタルを高める、そこに寄っていろいろな人づき合いをし、あるいは新たな出会いが生まれることで、個人が持つソーシャル・キャピタルが高まるのではないかと考えられるでしょうし、あるいは社会レベルで考えたなら、図書館があるということ、そこで様々な交流が行われているということが、地域にソーシャル・キャピタルをもたらすのではないかというように考えるのでしょう。まず、そういうようにソーシャル・キャピタルが図書館のおかげで高まっていけば、その先によいことが起こるのだろうと。皆が健康になったり、治安が良くなったり、協力が上手く働いたり、世の中が上手く回りやすくなるのではないかと考えて、まずは図書館を出発点として捉えるということになるのかと思います。ただ、もちろん因果は逆にもできる話で、図書館を結果に持ってくることもできるのだと思います。それこそソーシャル・キャピタルが多いようなところ、人づき合いが多いようなところ、他人を信じているようなところ、そういう地域の方が例えばいい図書館を作りやすかったりとか、あるいはそういうものを持っている人が図書館を使いやすいとか、よく利用するとかそういうメカニズムも当然考えられるのでしょうから、ソーシャル・キャピタルが図書館に対して何かをもたらす、ソーシャル・キャピタルが図書館利用を上げるとか、そういう仕組みだって考えられなくはないのだとは思います。ただ、図書館がどうしていくべきか、いかにすべきかと考える時はそれを原因にして考えていることが多いのでしょうね。

## 図書館はソーシャル・キャピタルを高めるのか

それでいくつか議論を見ていこうと思うのですが、図書館という存在、図書館におけるプラクティス、図書館において人々が何かを行うということが、人の、あるいは地域のソーシャ

ル・キャピタルを高めるのかということが考えられます。一方で、ソーシャル・キャピタルが図書館のあり方、使い方に、図書館の存立に影響を与えると考えることもできるんだと思うのですけれど、両方の点から見てみようかと思います。

まず、図書館がソーシャル・キャピタルを高めるのか、ということについて個人、またマクロレベルデータを用いた話があるので、このあたりで少し話をしようかなと思います。もう一つ、これは最近立ち上がった話なのですけれども、ソーシャル・キャピタルと図書館利用に関連があるという議論が、最近ネットで話題になったものもあるので、このあたりも使いながら考察していこうかなと思います。

図書館があると、また図書館を利用すると、図書館によって人間関係、付き合いが生まれ、信頼が高まったり、ソーシャル・キャピタルが生まれたりするのかということについて、いくつかの研究が見つかります。例えばジョンソン（Catherine A. Johnson）という研究者が“Do public libraries contribute to social capital?”という論文を書いています[10)]。図書館利用者と一般市民の間、図書館利用者では図書館のブランチを三つ、大体40人ずつぐらい取り上げたのか、ですから人数はそんなに多くないのですけれども、図書館を使っている人と普通の世論調査で取れている一般市民の間にはいろいろな形で差がある。図書館を使っている人の方が、ソーシャル・キャピタルが多い、という差が見られるという話なのですけれども、さらに図書館に行っている人の分析では、図書館の利用度が高まれば高まるほど、地域活動の参加に正の相関があるというような関係が見られると言っています。(表)データはこんな感じで“library visit”、図書館に行く頻度なのですけれど、図書館に行く頻度が増すと、この辺ですね、数字がたくさんあってアスタリスク、星もたくさんついていますけれど、コミュニティに参加していったり、あるいは政治的なことだとか市民参加、あるいは寄付なんかを行ったりといった領域で、図書館に行く人の方が、図書館に行く頻度が増せば増すほど、そういう社会の関わりが多くなっていくというような結果を出しています。

あるいは、“individual social capital”、すなわち個人で持つソーシャル・キャピタルの性質ということなのですが、“frequency of library visits”、図書館に行く頻度が増すと何が起こるかというと、人間関係の中の「リーチ」（reach）に正の相関が出ます。このリーチについて説明します。社会学で職業威信スコア、というのがあって、職業に貴賤は全くありませんしあってはいけませんが、世間的に高く評価される仕事から、社会的評価がそれほどでもない、という様々なバリエーション、これをスコア化したものです。人間関係の多様性を測る時に、どれだけの種類の人と付き合っているのかということを測る時によく使います。そちらで計算したのが表中のダイバーシティ、というものなのですけれども、図書館に行くからといってダイバーシティは有意に上がりません。図書館によく行く人の方が、多様な人間関係をもっているということにはならなかったのですが、図書館によく行っている人はリーチの方が高い。リーチはここでは、職業威信スコアの上位三職種の人との付き合いがあるか、のいうもので計算しています。上位三職種というのは医者とか弁護士とかそういう人です。そういうリーダー的な人へのアクセスが図書館に良く行っている人の方が増す、そういう意味で、人間関係の幅は広がっていないのだけれども、リーダー的な人へのアクセスが図書館に行く人の方が多いというような結果を出しています。研究法も含めて、いろいろ議論のあるところだとは個人に思います。

次にこれは芦田淳さんのものです。パットナムはイタリアで研究をやっているのですけれども、その結果をふまえて、『現代の図書館』の2012年の最初の号に載っていった結果です[11)]。これはソーシャル・キャピタル特集号で、そこではイタリアにおいて読書とか図書館利用と、ソーシャル・キャピタルの間には地域レベルで相関が見られるというデータを出

しています。（図）これは一個一個の点はイタリアの州なのですが、読書とソーシャル・キャピタル、というグラフは横軸にとっているのが読書率ですね、読書をみんながたくさんしている地域の方が、縦軸のソーシャル・キャピタルが多いと。こちらは図書館貸し出しの比率ですね。図書館をよく利用している、貸し出しが多いようなところの方がソーシャル・キャピタルが多い。これは図書館利用率ですね、図書館利用者が多いような州の方がソーシャル・キャピタルが多い、イタリアの結果です。そういうような結果が集計レベル、“aggregate level”と言いますけれども、見られるというような結果です。

あと、小林哲郎さんが日本のデータで都道府県別の図書館数とソーシャル・キャピタルの間に関係が見られるのではないかという議論をしています[12)]。（図）結果を先に見てしまいますが、こちらが都道府県別の図書館数で、人口100万人あたりで調整しています。人口あたりの、ということで平均してはあるのですが、大規模の都市地域はどうしても図書館数が少なくなります。図書館はどうしても、人口に比例する形でそのままは建てられないので、残念ながら大都市圏に不利な指標になっています。（図）こちらは一個一個の点が都道府県で、X軸が人口あたりの図書館の数です。Y軸がソーシャル・キャピタル指数です。これで見ると、図書館が多いところの方がソーシャル・キャピタルが多いという斜めの線が見られます、一応。一応見られるのですけれど、これは統計学的には有意な関係はなく、人口というのを考慮すると消えてしまう程度の関係に過ぎません。どうしてかというと、人口が多いと100万人に対しての図書館数も減ってしまう、どうしても。図書館は人口に応じて比例しては作れない。また人口が多い都市には不利なソーシャル・キャピタル指数の作り方を、付き合いとか交流とかに関して実はしているので、ここで一見すると図書館数とソーシャル・キャピタルに見かけの相関が出てしまいますが、実は図書館があるからといってソーシャル・キャピタルが増えるわけではないことが説明されています。

（図）一方でこちらは各県の一般的信頼、人を信じているかということを並べた県ごとの指標です。すると、人口当たりの図書館数が多いところの方が、一般的信頼が高くなります。図書館があるということが地域住民の一般的信頼を高めるという結果がここでは出ています。そういう意味で図書館はソーシャル・キャピタルに貢献している。この論文の議論では、図書館が多様な他者との相互作用を生み出すことによってソーシャル・キャピタルを生み出す、ということはどうもあまりなさそうだとしているようです。図書館があることによって、そこで交流、付き合いが生まれてそれによってソーシャル・キャピタルのレベルが高まることにはなってない、実際ソーシャル・キャピタル指数との間には相関がないので、そういうメカニズムにはなっていないけれども、図書館というのは誰にでも開かれている平等な施設で、そういうものがある、平等な社会制度が実現しているという認識があると、それが一般的信頼を高める効果を持つのではないかと指摘しています。図書館という社会制度が機能していると認知されることが、一般的信頼を高める効果があるのではないかというメカニズムです。世界価値観調査の分析などでも、信頼度が高い国の方が公共図書館への支出が高いという結果があって、公共図書館があるということが、社会が上手く回っているという認識を与えることで一般的信頼を上げているのではないかという仕組みで考えている。ただ、この辺もあまり研究がないところで、図書館が一体どんな風にソーシャル・キャピタルとか信頼に結びついていくのかということについては不明な部分が結構あるのではと思います。

## ソーシャル・キャピタルは図書館利用につながるか

先ほどもう一つやりたいと言いましたけれども、ソーシャル・キャピタルが図書館利用とつながるのかということについて最近出てきた議論です。筑波大学の方たちが今年学会発表

されたのですが、10日ぐらい前に『シノドス』というネットマガジンで論考を書かれて「図書館は格差解消に役立っているのか？」というウェブの記事を立てられました[13]。これは多くのブックマークがついたりリツイートされたりして、かなり話題になったので、この話を少ししようかなと思います。

これは国会図書館の『図書館利用者の情報行動の傾向及び図書館に関する意識調査』[14]というネットサンプルの分析結果に基づいているのですけれども、経済資本とか文化資本、社会関係資本と図書館利用の間に相関が見られると。（図）地域に愛着を感じている人とか、地域活動に参加している人、下に行くほどソーシャル・キャピタルがあるわけですが、ソーシャル・キャピタルのある人の方が図書館を使っている。そんなに不思議な結果ではないかもしれません。ここではソーシャル・キャピタルのある人の方が図書館を使っている。また先ほど文化資本と言いましたけれど、文化資本、教育水準が高いとか、あるいは様々な文化的な活動に参加している人の方が図書館を使っていると。それも自然な結果でしょうか。あと、豊かな人、裕福な人の方が図書館を使っていると、そういう結果を出しています。実際、教育年数が高いとか美術館に良く行くとか、あるいは地域活動によく参加しているということが、図書館の利用に影響を与えていて、ソーシャル・キャピタルを、文化資本を持っている人の方が図書館を使っている、図書館をよく使っている。あるいは、お金を持っている、豊かな人の方が図書館を使っている。これは、図書館は格差を解消するのにあまり役立っていないのではないか、というロジックで議論しているのですね。恵まれた人が図書館を使ってしまっているので、このままでは図書館は資本を再分配する仕掛けとしてうまく機能していないのではないか、と触れています。図書館に資本の再分配機能がなければいけないのかどうか、という問題はあると思うのですが、図書館は一般に開かれていて誰でもアクセスできる、さらに言うと知識のレベラー、として、格差を解消させる仕組みがあるのであれば、とは思うのですね。しかしこの研究の結果から言うと、経済資本や文化資本に恵まれていたり、社会関係資本に恵まれている人の方が図書館を使っている、その人たちが図書館によって、いろいろなものをまた作り上げてしまうのだったら、その人たちの各種資本が向上しますから、ますますそうやって格差が広がってしまうのじゃないか。この研究では因果関係を示すものではないという留保付きで、非常に慎重に書いています。恵まれない立場、資本を持っていない人の方が有利であれば、資本と図書館利用にマイナスの関係が出ることが考えられ、ここではプラスの関係になっているから、むしろ格差が広がる方向に機能しかねないのではないかと、たぶん言っているのだと思うのですね。これも、気もちはわかりますし、図書館はどうあるべきかという話に密接につながってくるのだと思います。これをふまえてネット上でもさまざまな議論になりました。

もっとも、同じような結果で逆のことを言っているような側面もあるかもしれません。最初に取り上げた研究結果では、図書館を使っている人、地域の方がソーシャル・キャピタルも高くなると言っていて、そうなると図書館を使ってソーシャル・キャピタルが上がればいいという話でそれだけならいい話になるのですが、同じような相関の結果で、ソーシャル・キャピタルを持っている人の方が図書館をよく使っていたら格差拡大しかねない、という議論にもなるわけです。スライドには「ソーシャル・キャピタル、格差、図書館」と書きましたけれど、ソーシャル・キャピタルだけではなく、文化資本や様々な資本があるわけですけれど、それと図書館の関係を考えた時に、今まで議論していたのは何かというと、それこそさっきのジョンソンとか小林さんが言っていたこともそうですけれど、図書館によってソーシャル・キャピタルが高まるのではないか、と論じているのですが、ソーシャル・キャピタルの程度と図書館利用の程度には相関があるとか、図書館の存在との間には関係があるとい

うデータだけではどちらが原因でどちらが結果か分からないのですね。

（図）因果関係というと、二時点目を考えなくてはいけませんが、図書館がソーシャル・キャピタルを生み出すと考えている時はこちらの矢印で考えているわけです。図書館によって絆が生まれた、ソーシャル・キャピタルが高まる、と言う話ですから次の時点でこうなるだろうという話です。それに対してソーシャル・キャピタルと格差の方向で考えられている方々はこちらの線を考えていて、ソーシャル・キャピタルの多い人の方が図書館の利用は高いとか、様々な文化資本に恵まれている人の方が図書館利用が多いということになったなら、それが積もり積もって、出発点の資本のレベルが変わってくるだろうと。だから、ソーシャル・キャピタルとか文化資本があった人の方が図書館を使っていると、そういう人は図書館を使ってまたそういう資本を高め、そのサイクルで格差が拡大する可能性がありうるというラインで考えているのでしょうね。一方、同じような結果で、図書館がソーシャル・キャピタルを高める、という研究もあるわけです。

どこまで喋ったらいいのだろう、もうほとんど終わらなければいけない時間ですね。

（司会者）まだです。

## まとめ

ではおしまいのオチを喋って、で。ごめんなさい、時間コントロールがうまくいかなかったです。

個人的に思うのは、たぶんどちらもあると思うのです。おそらく図書館という仕組みはいろいろなきっかけを作ったり、つながりを作ったりして、ソーシャル・キャピタルを高める、あるいは格差を減らしていくようにもなっているでしょうし、あるいは、ソーシャル・キャピタルを持っている人とか、恵まれている人、豊かな人の方が、より図書館などを使ってさらに自分の能力を高めていくという側面もあるのでしょう。きっと真実はたぶん真ん中にあって、両方起こるのだと思います。ただ、最近議論されているのは、ソーシャル・キャピタル自身にすでに格差があるのではないかということです。恵まれた人がソーシャル・キャピタルも多いということが最近指摘されるようになってきました。実は、パットナムその人が今年出した本の中で、ソーシャル・キャピタルの格差、についても言い始めています[15)]。

（図）恵まれた人ほど親友が多かったりとか、あるいは教育水準の高い親ほど多様なネットワークを持っていたりとか、裕福な家の子ほどメンターが多くなる、多様なアクセスがあり、例えば大学の先生の知り合いとかが親にいたりするわけです。結果として、進学の時の相談にも恵まれた子の方がより乗ってもらいやすい。ソーシャル・キャピタルの力を、現在ではより恵まれた人の方がより行使しやすくなってきてしまっているのではないか。裕福な地域に住んでいる人の方が住民を信頼しているとか。あと恵まれた親とそうでない親の間で生まれた子で、信頼感の格差がこのところ拡大しつつあるとか、そのあたり、ソーシャル・キャピタルにもう出発点での格差があるかもしれないということは指摘されているところです。

ソーシャル・キャピタルは、もともと解決策として考えられていたと思うのですね。お金がなくても、恵まれていなくても、絆があるから、何とかなる、直せる、セーフティネットになる、というところから始まったようにも思います。ソーシャル・キャピタルに対する関心とか、ソーシャル・キャピタルが何かの解決策になるというのは、そこから来ていたのではなかったかと思うのです。ここでぱっと思い出したのが『共産党宣言』なのですけれども、万国の労働者よ団結せよ、我々にはつながりしかないのだ。失うものは鎖だけで、連帯によって私たちは事態を変えていく。でも、今や恵まれない人が付き合いをもたない、そういうような状態にもなりかねないわけです。図書館に対して、ソーシャル・キャピタル論から気に

なることですが、図書館は現在さまざまなことをやっていて、本当にいろいろな工夫とか努力とかもしているように思います。でも例えばこういう議論がされていたり、ソーシャル・キャピタルの格差のようなことが言われたりしている時に、そういう試みが、そもそももともとつながりやすい人、つながれる人や、つながり強者みたいな人に、よりつながりを作り出すような仕掛けにならないようなことをきっと考えなければいけないのかと。要するにイベントや、さまざまな介入が、橋をかけるような、多様性に資するようなことができているだろうか、というようなことを考えなければいけないのかなと思います。また、先ほどの結果でも、やはりソーシャル・キャピタルがない、文化資本のない人は図書館に来ていないわけですが、ひるがえって、そういう人たちにもあふれ出すようなプラクティスはありえるのかと考えてもいいのかなと。ソーシャル・キャピタルは、公共財として、実は参加していない人にもメリットがあるという議論があります。さきほどの雪かきを考えればいいと思います。ソーシャル・キャピタルがあるところだと雪が無くなるので、雪かきをしなかった通りすがりの人も安全に歩けるようになるのです。ソーシャル・キャピタルというのは公共財として、つながり合ってない人にすら恩恵を与えるような機能があると考えられます。来ないような人にも、何かプラスをもたらすようなプラクティスはあるのかということも考える必要があるのかということが、なんとなく感じたことですね。格差とかソーシャル・キャピタル、あとは図書館の問題は、いろいろとつながってきそうな気はするので、このあたりまた今後も論点となってくるのかなと思います。

すいません、時間コントロール全然でした。これぐらいで話を終わりにしようと思います。

## 質疑応答

（司会者）本当にありがとうございました。皆さんの方からも質問がいっぱいあると思いますので、どうぞご自由にお手を挙げていただければと思います。記録を取っているのですけれども、今日は、柴内先生への、何て言うかな、挨拶的な意味で自己紹介していただきたいのです。記録を起こす際には特定されない様に配慮をしたいと思いますので、どうぞご自由にお手を挙げてください。お願いします。

私は山ほどありますので、皆さんがしないと私が矢継ぎ早に出してしまいます（笑）。どうぞどうぞ。

（質問者 1）じゃあ、私ちょっと一個。さっきこう、ばってんになって、最後の方で出てきた話ですけれども、アメリカの研究と日本の研究の話で、要するにお互いベクトルが違うのじゃないかっていう話をされていたのじゃないかと理解したのですけれど。まず、それって合っています？アメリカの研究だと。
（柴内）アメリカの研究だとっていう話じゃなくて。
（質問者 1）これの前のページにアメリカの。
（柴内）これはアメリカの研究ですね、次がイタリア。
（質問者 1）で、これが日本の、違う、こっちが日本の。
（柴内）日本です。まあ、いずれにしても、これ何が言いたいかというと、ソーシャルな図書館とか絆を生み出す図書館と考えるのであれば、基本はこの線なわけですよ。図書館があることとか図書館を利用するということが、絆を生み出す、つながりを生み出す、ソーシャル・キャピタルを生み出すと考える。だから、普通、図書館がソーシャル・キャピタルとどう関係するかっていう時は、この線の方向で考えるのがデフォルトだと思うけれど。まったく同じ相関関係、同じ形式の結果を使って、いや、ソーシャル・キャピタルがある人の方が

図書館を使うでしょっていうロジックで言った話も最後には出てきています。その辺から、格差の問題、あるいは格差の縮小装置に図書館がなっていない、と。だから、図書館をどう見るかっていう点で、プラスに見ることもできるし、あるいは限界を見ることもできるのですけれど、同じデータで別の側面を見ているんだなというようなことを感じたと。
（質問者 1）アメリカでは、ミドルクラスばかりが図書館を使っているっていうのはずっとこう議論としてあって、ただし、それを反省的に捉えてプロフェッショナル・ライブラリアンが色んなプログラムを開発してきた、それが例えばシカゴにおける、ああいう境界のところに作って、そしてボランティアには恵まれた人が来てという。あの実践っていうのは、例えば私この前カリフォルニアに行ってきたのだけれどもカリフォルニアなんかでもあらゆるところで要するに、恵まれた人が恵まれていないリテラシーが低い人に、何かボランタリーに教えるとかっていうのも、基本のプログラムになって一所懸命それを作り出そうとしていて、日本とそこが私はいつもすごく違うっていうように感じているのですけれども。その、そういうアメリカで一所懸命やっている実践があっても、まだ多様性というようなことに関して寄与するっていう事は、図書館はできていないのかなぁってこと、さっきの…
（柴内）このデータに関して言ったら。
（質問者 1）ダイバーシティの。
（柴内）ダイバーシティのスコアとの相関はないです。だから、そういうことにはプラスに働いていない。いくら図書館に行っても、人間関係の多様性、社会の上から下の人まで色んな人と付き合うっていうダイバーシティっていう点では、そうですね、こういう結果になっていませんね。上の方へのリーチはできているのだけれど、ダイバーシティはできていないっていうのは、このデータでは言えると。
（質問者 1）いや、日本でだけ、その恵まれた人たちだけが使っていて、それが繰り返されていて、むしろ格差を広げる機関になっているっていう話ではないのですね、やっぱり。日本のもう一つの調査だと、そういう再生産が起きている可能性っていうのが示唆されているわけですよね。でも、アメリカのこの［ジョンソンによる］研究でも、そういう風に、再生産の話は出ていないにしても、格差の解消には少なくとも。似たような人しか使っていないっていう。
（柴内）これ、三つのブランチ取り上げていましたけれど、一つは恵まれた地域だったと思いますけれど。二つは黒人と半々だったり、黒人出身だったりする、そういう意味では環境的には恵まれていないような地域を使っていたと思いますけれど。その三つの混合で、こんな感じの結果だったという事ですね。

（質問者 2）よろしいですか？
（柴内）はい、どうぞ。
（質問者 2）ダイバーシティが高くなければ格差解消につながらないという話、少し飛躍があると思います。それは置いておいて。実は、さっきの、筑波 [ 大学 ] の関係者らの社会情報学会での発表ですが、騒ぎになる前にこのデータを見て、意図するところは分かるけれども、問題の枠組み、統計処理がちょっと粗いかなぁっていう感じを受けました。
　国会 [ 図書館 ] の調査の 1 年前に、公共図書館が閉館したと仮定した場合、自分の家族やコミュニティにどのような影響が想定されるかを、アメリカのピュー・リサーチ（Pew Research Center）が住民調査をしています [16)]。その調査によると、社会的弱者である貧困層の人々が困るだろうし、それはコミュニティの懸念だという結果でした。国会の調査はですね、公共図書館が閉館になった場合一番困るという回答層は、年収 1200 万円以上の層

で、その次が 1000 万円以上 1200 万未満の層という結果だけが示されています。つまり、日本の図書館では、貧困層は図書館利用からいわば排除されている状況ですから、そうした回答が出てこない。実は経済的弱者への配慮は日本の図書館利用にはほとんどないのです。障害者サービスはありますけれども。具体的に貧困層に向けてのサービスを、日本の図書館はほとんどやっていません。そして、日本の図書館の登録率は精々 2、30 パーセントですから、社会の広い層がインボルブされているわけではない。そういう図書館の使われ方、図書館の運営の仕方ですから、こういう結果は当然なのでしょう。もう少し問題状況を詳らかにしておく必要があり、にわかに彼らの指摘が一般的な格差という議論につながるかなぁという疑問があります。
（柴内）そうですね、このあたりはまだ問題提起、論点出しだと思います。また議論が始まっていけばと思うのですけれども。これはソーシャル・キャピタルの多い人の方が図書館使っているじゃないかっていう話なのですけれど。でも、これ逆に読めば、図書館利用している人は地域に参加する様になりますと逆のロジックで読めちゃうので。これ、どっちでも言える話なのですよね。ただこのような問題意識があれば、このデータでそれを言おうとするし、でもまったく同じデータでよくある、図書館がソーシャル・キャピタルを生み出すみたいな見方をすれば、図書館を利用している人は地域活動に参加するようになる、地域に愛着を感じるようになりました、とも読めますから。そういう読み方でも読めるということです。こっちはこっちで読む、となりますしね。
　もうちょっと先の分析をしないと、この種の議論は精密にはできない、しにくいのだとは思います。
（司会者）いかがでしょうか。

（質問者 3）（自己紹介後）よろしくお願いします。私が聞いていて思ったのが、なんか図書館を使うというのが基本自由、それぞれ個人の選択の行動なので、元々ソーシャル・キャピタルの高い人ほど図書館に行きたがるけれども、低くなるほど図書館に行きたがる人が少なくなるというのであって。例えば同じぐらいの人が、同じ程度のソーシャル・キャピタルの程度の人が図書館を利用するのとしないのでは、結果は変わってくるのではないのかなと思います。その点は、いかがでしょうか？
　元のレベルを考えて、読書をすることでそういうのが高まるというのは導き出されていると思いますので。同じ程度でスタートして、あまり利用する人、しない人というその後の傾向で辿っていくとどうでしょうか。
（柴内）それは、そうなのだと思います。ただ、だから結局、もちろんそうなのですけれど。もう一つの問題は、もしかしたら初期値で既にソーシャル・キャピタルに格差があるのかもしれない、っていうのがもう一つの問題としてこれから議論されるようになるかもしれません。親が恵まれているとそもそもその子どもはソーシャル・キャピタル、豊かなソーシャル・キャピタルを持ちやすい、っていうことになると出発点からこの格差が埋めこまれてしまう。それは、様々な情報へのアクセスとか、図書館利用とかそういうことも含めて関係してくるかもしれませんけれど。格差論でこの辺、議論する話はまた次出てくるかもしれないなと思います。
（司会者）他、いかがでしょうか？

（質問者 4）今回のお話としてすごく、特に日本の図書館のことで、ちょっと思った感想なのですけれど。図書館を利用するっていう、その利用の仕方、だから、一般的には図書館で何か本を読んだり、本を借りたり、調べたりっていうのが一般的な考え方なのですけれど。

今、日本、日本だけかどうかはあれですけれど、日本だと注目されているのは、その場所に行ってただ過ごすだけっていうか。本は読んでいるかもしれないけれど、集まるというか、集合でもない、行くだけ、その場で過ごすだけっていう使い方が、注目っていうか、特に若い世代とかあるかなって思って。何か調べたり読んだりするっていうことになると、ちょっと敷居が高くなると思うのですよ、やっぱり勉強したり、そういうことがないと行かないってことが考えられるので。だけど、ただその時間を、ただそこで過ごすだけっていうことになると、ソーシャル･キャピタルが高い人でなくても行きやすい。けれども、行くことによって必ずしもソーシャル・キャピタルが高まるとも言えない、というような、個で過ごすからというか、そこで何か関係性を作ろうと思って行くわけではないし、行ったところで作れるわけでもないというか。それは、例えばその、ちょっと悩んでいる中高生とかが放課後にただ単に行くだけっていうのもあるだろうし。例えば私の地区の公共図書館に行ったりすると、例えばホームレスの人もその場を過ごすだけで、空いてる時間に行くっていうのもありますし。ただ、集まっても何かが生まれるわけではないっていうのが、結構、日本の現状でもあるかなぁと思いました。利用っていうのがどういう利用なのかなっていうのも、結構考える上では重要なのかなぁと思いました。という感想だけなのですけれど。
（柴内）そうですね、あの私も、図書館の資料を使うというより、むしろ執筆そのものをするために図書館に行くような使い方を実際していたりしますから。図書館、図書館の方にも本当に色んな考え方があることはなんとなくわかるので、図書館とはそもそも何か、という問題にはあまり近づかないようにしているのですが（笑）。ただ、僕なんかはユーザーだからかもしれませんが、そんな使い方でもとにかく人が来て、偶発的にでも何か触れるとか接触するとかそういう機会があるっていうことにもしかしたら意味があったり、ライブラリアンがやれることっていうのがあるのかもしれないなというようにも思います。これ、メディアの議論であるのですけれど、偶発的な接触に実に意味がある。というのは何かというと、ニュースなんてのもネットで見れるわけですよ、何でも好きなものにタッチすれば、クリックすれば触れられるわけですし、どんどん向こうがお勧めしてきますから。自分の知りたいことに、どんどん触れられると。
　ただ逆に考えれば、オールドスタイルのテレビとか新聞っていうのは、別に自分の関心のないことも、ついでに見せられたりしちゃうわけですよね。古い仕組みといえば古いのですけれど、でもあれには意味があって、そういうたまたま接触しちゃうものというのが、世の中を広く理解するのに役に立ってたのじゃないかっていう議論がメディア論の中ではあります。要するに、自分のしたいこと、好きなことだけすると、どうしてもそこばかり追求しちゃうけれど、他の情報、たまたま偶然入ってくるような他の情報が入ってこなくなるから、例えば世の中で今、何が起こっているのかっていうことが分かりにくくなる。でも、その情報というのが他の人とつながる上で、たぶん、重要な意味をもっていたのだろうと。それは会話の基盤ですから。偶発的な接触、たまたま好きでもないけれど、新聞のフォーマットやテレビで見ちゃう、目に入っちゃうわけですよね。だから、単に過ごすだけで来てもいいけれど、そこでこんなことやっているとか、こんな本があるとか、こんな人たちがこんなことをしてるっていう、触れることがもしきっかけになったり、その人にとっての何か少しでもプラスになることがあるのかもしれない。そこは一つの可能性だけれどもという風に思うこともあります。すいません、上手く言えなくて。
（司会者）そろそろお時間ですが、最後いかがでしょうか、どなたか。

（質問者 2）パットナムは世代の話も出てきていましたけれど、要するに、人が郊外に住んで、

人が接触しなくなったと。今の図書館の話からすると接触の機会が減ったというのは、かなり大きいのじゃないかなぁと思います。接触の機会を確保するのは、出ていかなきゃいけないから、コストがかかる。でも、今はネットがありますよね。ネットでいつでも簡単に接触ができるじゃないですか。そういうものは、このソーシャル・キャピタルを作らないのでしょうか。

（柴内）ネットのソーシャル・キャピタルについては、あと 2 時間ぐらいいただけると一通り喋れるかと。前期に東京女子大学でも半年ほど教えましたから。これもまた説があって、インターネットの利用によってソーシャル・キャピタルはむしろ減退するのじゃないかっていう議論もあって、何でかというと情報検索とか情報が知りたいって形のつながりが増えてしまって、絆っていうのがむしろ損なわれるのじゃないかって議論もあったり。あるいは、いや、そうじゃない、それによって補強されたり。あるいは、むしろ弱者なんかがつながりを生みやすいような仕掛けとして機能するのじゃないかという議論もあります。これは、相手が見えないので、むしろそういう側面によってつながりにくい人とか、苦手な人なんかもつながる機会として機能するのじゃないかって議論もあったり。その辺、いろいろな論点があって、対立というか論争しているところです。“rich get richer” とか “poor get poorer” なんて言い方もしますけれど、ネットはやっぱり、要するにコミュ力があってリア充な人を強めちゃうのじゃないかっていう可能性も指摘されていれば、いやいやリアルではダメなのだけれども、ネットっていうものが被さることによって、むしろそういう人もつながりを作れるような風に機能するのじゃないかっていう視点、論者がいて、その辺、論争されているところだったりしますね。

　あともう一つ、最近、問題になっているのは、アルゴリズミック・フィルターによってシステムが変容してきていることの問題点ですね。というのは、あなたこんな人と知り合いでしょう？とか、あるいはこんな人とこんな情報に関心あるのじゃないの？興味あるんじゃないの？という風にして、向こうが提案してきてしまうことです。それっていうのはある種多様性を下げる可能性があるので、ニュース接触ということもそうですし、人間関係の幅っていう意味でもそうですけど。このリコメンデーションの仕組みが、実はソーシャル・キャピタルに悪影響を与えるのじゃないか。あるいは逆にセレンディピティみたいな新しい出会いってのを作り出せるような仕掛けとかを作れるのかというのは、業界でも考えていたり議論されていたりするところです。すいません、きれいな話にならなくて。

（質問者 2）　端的に言って、ソーシャルネットワークの身につけ方ってことですか。

（柴内）内輪で済むっていう感じですね、やっぱり。だから、それは逆に広がりを生み出さなくなっちゃうかもしれないっていう。少なくとも僕はその手の懸念で議論することが多いですね。

（質問者 1）図書館をメディアだっていう風な見方をしたりもしますけれども、インターネットというのもメディアとして考えて、何て言うかな、比較していくような研究っていうような可能性っていうのは今後ある？議論っていうか比較っていうか、現場っていう言い方があっているかはわかりませんけれども。図書館の方から見ると、インターネットが今のような…要するに SNS のこの仲間内のユナイトであるとか、機械によって何か提案されてしまって、要するに同調して行くような人たちの塊を作っていくとか、流れを作っていくというようなものをインターネットが進める一方で、私たちはダイバーシティを引き受けますみたいなことを、場所としての図書館の議論の中からしたいと思っているっていうのは、業界としてはあるような気がしているのですが。さっきそう安直には考えられないと警鐘を鳴らした

ような研究を紹介していただいたりはしたのですが、今後、そういうことをちゃんと研究としてメディアとして、一つのメディアとして、図書館を見てっていうことでやっていくことの可能性みたいなものはあるのですかね？それとも、やっぱり、かなり違うもので難しいのですかね。インターネットと図書館とかそういう見方っていうのが。
（柴内）個人的にはあんまり対比的に捉えたことはないのですけれど、面白いとは思います。あとは空間がもつ意味って大きいと思うので個人的には。リアルで、それって色んな意味で制約があったりするのですけれど、物理的環境ですから。でも、そのことがもつ意味って一方で大きいと個人的には思っていて、その辺、対比できたら面白いのかもしれませんね。すいません、あんまり余力がないから。
（質問者 1）インターネット研究者の方からすると、あんまり図書館はそのカウンターパートにはない、カウンターパートにはなりえない？いや、図書館側から見るとすごくあるのかなって思っていましたけれどね。
（柴内）別ジャンルとして捉えちゃっているのでしょうね。僕も、僕がまさに今、そうだから。ただ、それちょっと考えてみたいと思います。すみません、まったく別のものとして捉えちゃっていた側面があったので。
（質問者 1）別ってどういう意味ですか？すみません、長くなって。
（柴内）並べて捉える習慣を僕はもっていなかったから、っていうことだけです単に。そもそも図書館に詳しくないという。図書館について考える、利用者として使うことばっかりで。図書館の在り方について、今回やっとそういうことを何時間も考える機会を与えていただいたという。
（司会者）ありがとうございます。どうでしょう、最後の最後に一つありましたら、それで終わりに。正直に申しますと、今、完全に内輪のメンバーでしか話していなくて、外の人が一人でもいると楽しいかなと思いますが、どうぞ。

（質問者 5）（自己紹介後）今日は本当に面白いお話で、元々、柴内先生を知ったのがソーシャル・キャピタルの方からだったので、そこと図書館がつながっているのかというところを初めて考えた感じで。私は外から、図書館を使っている側なので、利用者としてしかお話はできないのですけれども。やっぱり、図書館に行った時に、個人で本を読む時間の方が長いので、全然つながりだとかはあんまり考えられないのじゃないかというか。どっちかっていうとやっぱりつながりとはかけ離れた場所っていう感じで図書館は使っているので。今回、ソーシャル・キャピタルっていうところで考えた時に、あ、でもそういえば図書館員の人が選書をして並べていたりとかするところで目を引かれたりとか。あとは掲示とかもその図書館ごとにやっぱり色が違うので、そういうところで図書館員さんっていうのと間接的にではあるのですけれど、私はコミュニケーションを取っていたのかなっていうのを今回すごく感じたので。顔は見えないのですけれども、そういう間接的につながれるところっていうところで、やっぱりソーシャル・キャピタルにちょっとは図書館が何かを担っているのじゃないのかなっていうのをすごく感じたので、とても面白かったです。ありがとうございました。
（司会者）ありがとうございました。では、遅くなってしまいましたが、今日はこのぐらいにしたいと思います。どうぞもし個人的にお喋りしたい、ちょっと一言喋っていきたい方は、どうぞ前にいらしていただいて。では、今日はこれで終わりにしたいと思います。今日は柴内先生、ありがとうございました。
（拍手）
（柴内）お粗末様でした。

[1] 『ソトコト』第 15 巻第 5 号 , 2013.5.

[2] 猪谷千香『つながる図書館：コミュニティの核をめざす試み』筑摩書房 , 2014, 238p.（ちくま新書）.

[3] Putnam, Robert D. *Bowing Alone: The Collapse and Revival of American Community*. New York, Simon & Schuster, 2000, 541p. 翻訳は、ロバート・D・パットナム著 , 柴内康文訳『孤独なボウリング：米国コミュニティの崩壊と再生』柏書房 , 2006, 689p.

[4] Ostrom, Elinor and T. K. Ahn. “Introduction,” *Foundations of Social Capital*. Elinor Ostrom and T. K. Ahn eds. Cheltenham, U.K, Edward Elgar Publishing, 2003, p.xi-xxxix.

[5] Fischer, Claude S. “Bowling alone: What's the score?,” *Social Networks*. 27（2）, 2005, p.155-167.

[6] 内閣府国民生活局「ソーシャル・キャピタル：豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて」2003.6.19. https://www.npo-homepage.go.jp/toukei/2009izen-chousa/2009izen-sonota/2002social-capital,（参照 2016-03-28）.

[7] Inoguchi, Takashi. “Broadening the basis of social capital in Japan, ” *Democracies in Flux: The Evolution of Social Capital in Contemporary Society*. Robert D. Putnam ed. New York, Oxford University Press, 2002, 516p.（猪口孝訳『流動化する民主主義』ミネルヴァ書房 , 2013, 451p.）

[8] 坂本治也『ソーシャルキャピタルと活動する市民：新時代日本の市民政治』有斐閣 , 2010, 264p.

[9] Putnam, Robert D. and Lewis Feldstein. *Better Together: Restoring the American Community*. New York, Simon & Schuster, 2004, xvi, 318p.

[10] Johnson, Catherine A. “Do public libraries contribute to social capital? A preliminary investigation into the relationship,” *Library & Information Science Research*. 32（2）, 2010, p.147-155.

[11] 芦田淳「イタリアにおける社会関係資本（ソーシャル・キャピタル）と図書館利用」『現代の図書館』Vol.50, No.1, 2012.3, p.27-34.

[12] 小林哲郎「図書館と信頼」『現代の図書館』Vol.50, No.1, 2012.3, p.12-19.

[13] 片山ふみ , 野口康人 , 岡部晋典「図書館は格差解消に役立っているのか？」『シノドス』2015.12.7. http://synodos.jp/society/15672,（参照 2016-03-28）.

[14] 国立国会図書館関西館図書館協力課調査情報係「図書館利用者の情報行動の傾向及び図書館に関する意識調査」『カレントアウェアネス -R』[2015], http://current.ndl.go.jp/node/28543,（参照 2016-03-28）.

[15] Putnam, Robert D. *Our Kids: The American Dream in Crisis*. New York, Simon & Schuster, 2015, 386p.

[16] Zickuhr, Kathryn, Lee Rainie and Kristen Purcel. *Library Services in the Digital Age*. Wachington D.C., Pew Research Center, 2013.1.22. http://libraries.pewinternet.org/2013/01/22/library-services/,（accessed 2016-3-29）.